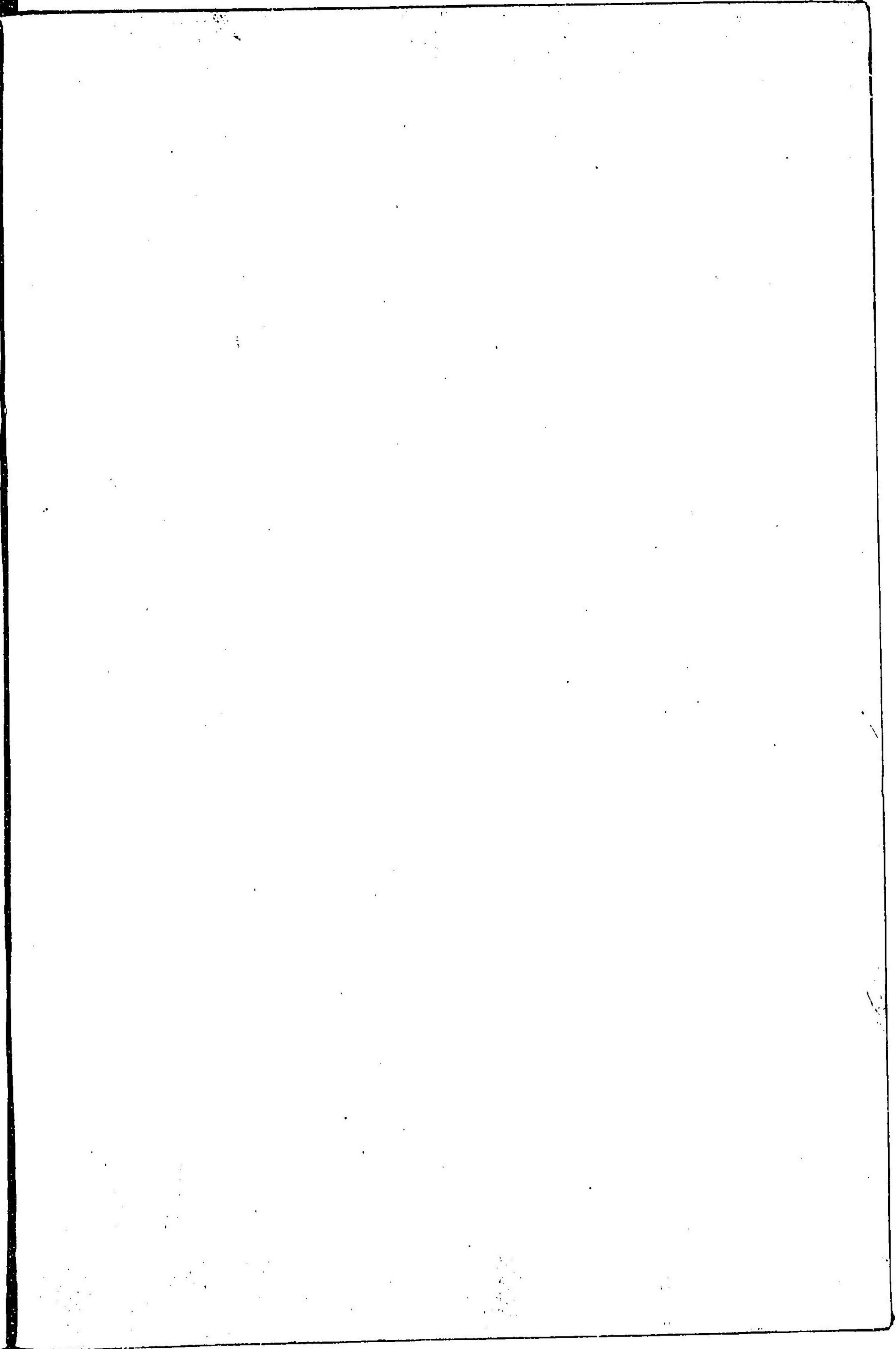
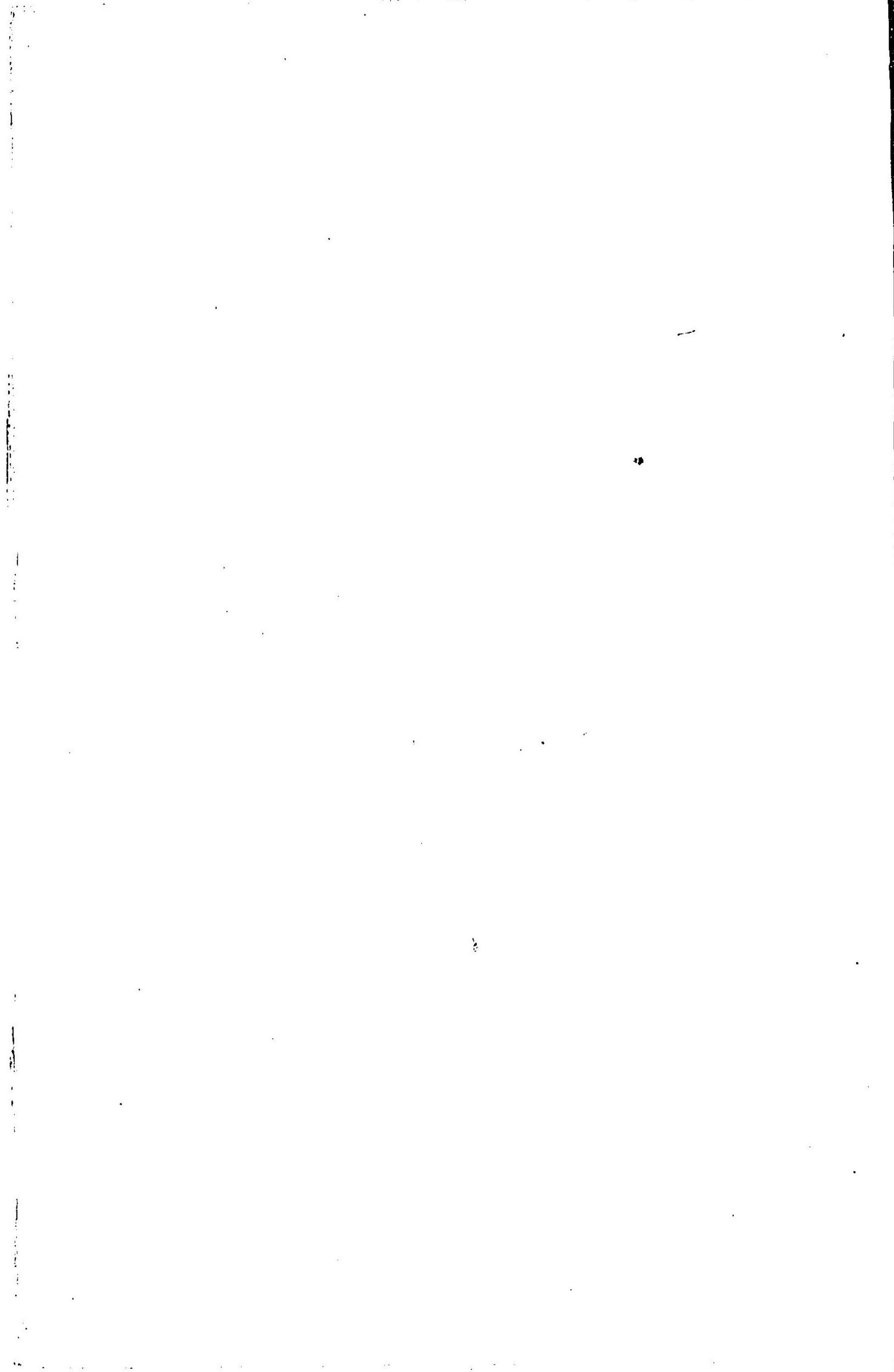


別世流
能世流
古著云

侯 昭
叔 家 信
吉 野 翁
龜 太 皐
錦 戶

書

東 京 圖 書 館			
六	一	五	二
冊	號	架	函
			音 樂 注 藝 類
			和 書 門





漢路

漢路の始元をやく漢路の
成らん早稲松島の當今よはく

なぶ下也倭を我宿願の子細き

よより住吉玉津嶋よし赤碓はりての

又能決るあまのしきより漢路乃玉

よ後り神代乃古跡をよ一見をりや

としな^るの^記の海や波吹上^るう^る
 風よ^く疎^をけ^るの^身真^津舟^塩
 踏^預あ^く踏^りき^らく^なら^そお^震
 待^りけ^や淡^路方^きも^急よ^きり^く
 急^の預^も口^もも^や淡^路の^國よ^き
 の^代可^の人^を侍^神代^の古^跡を^尋
 ち^やと^そん^の神^の代^の跡^をあ^ら
 ち^やと^そん^の神^の代^の跡^をあ^ら

海^の長^國の^波の^淡路^の
 種^を治^める^は苗^代水^も
 豊^{あり}又^陰陽^の神^代より
 今^人界^よも^あら^く山^行草^も
 國^の皆^神の^惠よ^作り^田の^あ
 地^はち^らち^きさ^らる^はて^十里^に
 万^里の^外に^も皆^ある^のし^め

あひまひのく〜として又十のた
てららるるをさく神を祭るもの程を
いある事よ谷水をせく水口よ
い〜く首代小田の程を
よまの^祠具上沢野田の當社二の
宮の石田よりくは〜程よ
よ外清浄をて野田と作り

久^年保の田社二の宮よりく
まのまの〜まは〜く〜
まの枝や若い〜乃程現をて
は〜の程を^年程をあり〜
く〜の程ありある田社の二の
まの〜まの〜程としては中一
二の次第よあり〜^程程

法

社乃社ノ一柱ノ社ノ正殿ニ

社ノ宮居ニ具修スルニ乃

何れニ^全是ノ則^正伊勢^正伊

祭冊乃^正二柱ノ神代ノ^正

乃^正後^正路ノ^正玉^正若^正神^正は^正

乃^正二^正宮^正と^正あり^正

申也^正独^正く^正安^正有^正り^正也^正法^正く^正

法去ノ種^正を^正乃^正多^正く^正更^正乃^正惡^正德^正

只^正此^正神^正ノ^正勢^正を^正乃^正更^正新^正也^正

乃^正後^正乃^正出^正世^正也^正

乃^正此^正神^正ノ^正德^正乃^正社^正ノ^正勢^正を^正

乃^正此^正神^正ノ^正勢^正を^正乃^正更^正新^正也^正

乃^正此^正神^正ノ^正勢^正を^正乃^正更^正新^正也^正

乃^正此^正神^正ノ^正勢^正を^正乃^正更^正新^正也^正

乃^正此^正神^正ノ^正勢^正を^正乃^正更^正新^正也^正

法

五

目^二前^一乃^二所^一夢^二見^一也^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一
ラ^二ズ^一也^三今^二目^一ア^二モ^一モ^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一
ヲ^二モ^一天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一也^三苗^二代^一乃^二ウ^一ク
水^二ウ^一ラ^二ク^三モ^一ク^二モ^一喜^二雨^一乃^二カ^一然^二ト^一ス^三
也^三今^二目^一ア^二モ^一モ^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一
里^二乃^一ハ^二天^一上^二神^一代^三ハ^二タ^一ス^三也^三今^二目^一ア^二モ^一モ^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一
秋^二ノ^一モ^二ア^一ル^三ナ^二ラ^一ク^三モ^一喜^二雨^一乃^二カ^一然^二ト^一ス^三

意^二有^一種^二乃^一也^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一
ウ^二ハ^一天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一也^三今^二目^一ア^二モ^一モ^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一
ハ^二カ^一天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一也^三今^二目^一ア^二モ^一モ^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一
地^二ト^一モ^二天^一上^二神^一代^三ハ^二タ^一ス^三也^三今^二目^一ア^二モ^一モ^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一
行^二乃^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一也^三今^二目^一ア^二モ^一モ^三天^二上^一神^二代^一ハ^三タ^二ス^一

向^ニ玉^ノ天^ノ降^リり^マひ^テ地^ノ神^ノ身^ノ四
乃^ハ何^レ子^ノを^ハ出^ス生^ス矣^有經^ニ
手^ノ代^クと^ルや^上天^ノ下^ヲを^コス^ル後^ニ
事^ト入^リて^ハ十^三万^六千^八百^余歲^ニ
こ^ノ目^モあ^ル王^子達^ハ九^代と^シ
乃^リ城^ノ權^現と^シ影^モは^なあ^らず^シ
あ^らず^シの^神代^モ只^今の^代

日^ノ去^成一^日矣^神乃^レ代^ノ道^直直^ヨク
今^トも^ハ成^秋津^別乃^レ君^レは^影と^有
か^レる^影と^日から^まる^事
乃^レ始^メと^ハあ^らず^シ浮^橋の^真
を^引つ^ては^まり^入る^事
乃^レも^ハ浮^橋の^真と^あら^ずシ^事
云^ノの^代乃^レ神^奇乃^レ鳥^羽玉^乃我

黒髪を 乱すはの緒しを糸よ
 一の二手松乃奇れよまき神
 一の二走らるる者溪路よさうさ
 一の二天乃戸を滝り矢よまきりく
 一の二空にても神乃世をくば来は
 一の二あつてまのまのりよくの虚空よ
 一の二お神樂乃月よ変りてまきたる氣

一の二色にふるふにまのまのりよくの虚空よ
 一の二らにのこまのまのりよくの虚空よ
 一の二内せる白むの段よのの溪路よ
 一の二月雲乃あつて長月よの縁のまよす
 一の二心海乃あつて守誓者よまよす
 一の二将乃風よ求あつてのまのり神
 一の二とわ我よの治まよの常きま

始りより地の神の代表
同青の君の代り和と書
瓊神の杖奈の四風吹及
山の動塊吉有る時此
ぐ天乃浮橋乃其出可
はひ可なりたる意なり

乃有橋東西の海もく
南北は雲風を信る地の宮殿
の浮橋を立渡りまはす
乃時津風治まる八段の戸

二、一、
原乃、
二、下、
子、
ま、

出家僧

口
お、
法、
親、
申、
ま、
ま、

一、

一、

分るる事なり。中ノの事。唐ノ才ノ力ノ也。
 其母と鹿とを敬スる事。
 一日に伏野に於ては。其母と鹿とを敬スる事。
 又言ふ。鹿は松の木に棲む。虎は松の木に棲む。大石
 の間に於て。鹿と虎とを敬スる事。
 又言ふ。鹿は松の木に棲む。虎は松の木に棲む。大石
 の間に於て。鹿と虎とを敬スる事。
 又言ふ。鹿は松の木に棲む。虎は松の木に棲む。大石
 の間に於て。鹿と虎とを敬スる事。

人ノ名ノ也。其母と鹿とを敬スる事。
 又言ふ。鹿は松の木に棲む。虎は松の木に棲む。大石
 の間に於て。鹿と虎とを敬スる事。
 又言ふ。鹿は松の木に棲む。虎は松の木に棲む。大石
 の間に於て。鹿と虎とを敬スる事。
 又言ふ。鹿は松の木に棲む。虎は松の木に棲む。大石
 の間に於て。鹿と虎とを敬スる事。
 又言ふ。鹿は松の木に棲む。虎は松の木に棲む。大石
 の間に於て。鹿と虎とを敬スる事。
 又言ふ。鹿は松の木に棲む。虎は松の木に棲む。大石
 の間に於て。鹿と虎とを敬スる事。

よき人の後法をいふ事なり

是の箇白の箇白の箇白の箇白の箇白

思ふ事なり

多行勝の事なり

思ふの故家なり

くさくさなり

有命の事なり

浪の事なり

神壇なり

是相撮の國人

あつた事なり

形なり

神の事なり

事なり

事なり

事なり

たをまじく シテ だて シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

の シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

物 シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

青 シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

た シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

ま シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

あ シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

柳 シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

多 シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

下 シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

花 シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

青 シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

し シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

し シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく シテ かく

たふと申る早十二騎とは

十一早廿二早のりて

智十二騎と申る早餘の概百騎二

百騎のりて

まの由と信し

御寺の宿坊を

のりて思入

角を

志の由事

はのりて

信を志のり

和のりて

のりて

去のりて

御前

申す 御前より 御志大剛の志にて

有同番の申すに付入 申すに付

申すに付 清次うと申籠と被う御所

申すに付 清次うと申籠と被う御所

言指首断の申梅社以申すに付

申付て申すに付 危極よ由り付て者

そ儀彼者の子の申すに付 申すに付

申すに付 申すに付 申すに付

申すに付 申すに付 申すに付

申すに付 申すに付 申すに付

申すに付 申すに付 申すに付

申すに付 申すに付 申すに付

申すに付 申すに付 申すに付

申すに付 申すに付 申すに付

たまたまの事なり
甲寅

夫れ別れ善者と思ふは
あはれ

致すに物なり
あはれ

今度の子書り
あはれ

呼ぶに申す
あはれ

今由り申す
あはれ

書りて
あはれ

書りて
あはれ

今度
あはれ

今度
あはれ

今度
あはれ

今度
あはれ

今度
あはれ

今度
あはれ

こと掛く時を尋事もつるさ
 さまやむる事の時なりけりま
 事教書したけし時よりありぬ
 くてさくも君のまじりてそ
 事教と撞て心付きたる事
 同の事ありけりも撞て慰め
 事教書しき事なりてさく
 事教と撞て心付きたる事

青壁の行 湘浦のうらや城皇廿英
 陳毅昔もつる事なりけり
 事教書しき事なりてさく
 西山の事なりけり事なりけり
 事教書したけし時よりありぬ
 事教書したけし時よりありぬ
 事教書したけし時よりありぬ
 事教書したけし時よりありぬ

甲子年一の舟二 松浦の川三 西四 風五
 彼國六 松樂七 松浦八 松浦九
 松浦一〇 松浦一一 松浦一二
 松浦一三 松浦一四 松浦一五
 松浦一六 松浦一七 松浦一八
 松浦一九 松浦二〇 松浦二一
 松浦二二 松浦二三 松浦二四
 松浦二五 松浦二六 松浦二七
 松浦二八 松浦二九 松浦三〇
 松浦三一 松浦三二 松浦三三
 松浦三四 松浦三五 松浦三六
 松浦三七 松浦三八 松浦三九
 松浦四〇 松浦四一 松浦四二
 松浦四三 松浦四四 松浦四五
 松浦四六 松浦四七 松浦四八
 松浦四九 松浦五〇 松浦五一
 松浦五二 松浦五三 松浦五四
 松浦五五 松浦五六 松浦五七
 松浦五八 松浦五九 松浦六〇
 松浦六一 松浦六二 松浦六三
 松浦六四 松浦六五 松浦六六
 松浦六七 松浦六八 松浦六九
 松浦七〇 松浦七一 松浦七二
 松浦七三 松浦七四 松浦七五
 松浦七六 松浦七七 松浦七八
 松浦七九 松浦八〇 松浦八一
 松浦八二 松浦八三 松浦八四
 松浦八五 松浦八六 松浦八七
 松浦八八 松浦八九 松浦九〇
 松浦九一 松浦九二 松浦九三
 松浦九四 松浦九五 松浦九六
 松浦九七 松浦九八 松浦九九
 松浦一〇〇

錦戸

甲子年
 加模一 加模二 加模三 加模四 加模五
 加模六 加模七 加模八 加模九 加模一〇
 加模一一 加模一二 加模一三 加模一四 加模一五
 加模一六 加模一七 加模一八 加模一九 加模二〇
 加模二一 加模二二 加模二三 加模二四 加模二五
 加模二六 加模二七 加模二八 加模二九 加模三〇
 加模三一 加模三二 加模三三 加模三四 加模三五
 加模三六 加模三七 加模三八 加模三九 加模四〇
 加模四一 加模四二 加模四三 加模四四 加模四五
 加模四六 加模四七 加模四八 加模四九 加模五〇
 加模五一 加模五二 加模五三 加模五四 加模五五
 加模五六 加模五七 加模五八 加模五九 加模六〇
 加模六一 加模六二 加模六三 加模六四 加模六五
 加模六六 加模六七 加模六八 加模六九 加模七〇
 加模七一 加模七二 加模七三 加模七四 加模七五
 加模七六 加模七七 加模七八 加模七九 加模八〇
 加模八一 加模八二 加模八三 加模八四 加模八五
 加模八六 加模八七 加模八八 加模八九 加模九〇
 加模九一 加模九二 加模九三 加模九四 加模九五
 加模九六 加模九七 加模九八 加模九九 加模一〇〇

きんたに致しむるに付しき。君よ心算りのや
あと雲くや付金おせむきてしをき
後遺愛あくの威よくの威者の申作
やん我も君よ心算りのやよさやめる
目よ出仕やるとし。た更よは対面もあ
くの同げよらうらなぬ事となぬ威
よ頼別よるとは教書よあつた。あつた。

しよよとておるに付しむるに付しき。君よ心算りのや
よ同らよとておるに付しむるに付しき。君よ心算りのや
作事進よとて三男私白求の之部よと
てんと同らよとて私白求の部よとて
ひよとて同らよとて私白求の部よとて
申作 進よとて同らよとて私白求の部よとて
くの 進よとて同らよとて私白求の部よとて

何の為にその^下出^上の事
事終れば非も扱も我目し小出仕
中より更には対面を早くの間決より力
及ん悪くする有毎ふ頼別より此教
平に有るが。意は其もあらやめて
以程小恭衛我同心一早教教入事
一其の事しては少く何とも思ふ事

作そ^下信長て承のしぬ我君も入
の申あはて「且」は恨の申は社
の思高也の申言し上降の事
名は名^下の事^上の事^中
口入の事^下の事^上の事^中
可也(其の事)は自君よは(其の事)
の事(其の事)の事(其の事)

兄の事さ シテカ 弟の事さ シテカ

命 シテ 具はる親子 シテ 兄弟也 シテ

多量の論は月より シテ 加ふを シテ

事あるは是は シテ あり シテ 今 シテ 今 シテ 也 シテ

思ふ シテ 弟 シテ 九 シテ 乃 シテ 多 シテ 子 シテ あり シテ 也 シテ

と シテ 思 シテ 弟 シテ 多 シテ 子 シテ あり シテ 也 シテ

ま シテ 思 シテ 弟 シテ 多 シテ 子 シテ あり シテ 也 シテ

お前さんへ事へ シテ 者へ シテ 事へ シテ 出 シテ 也 シテ

お前さんへ シテ 事へ シテ 者へ シテ 事へ シテ 出 シテ 也 シテ

何 シテ 方 シテ へ シテ 相 シテ 也 シテ

我君へ シテ 事へ シテ 者へ シテ 事へ シテ 出 シテ 也 シテ

何 シテ 方 シテ へ シテ 相 シテ 也 シテ

お前さんへ シテ 事へ シテ 者へ シテ 事へ シテ 出 シテ 也 シテ

お前さんへ シテ 事へ シテ 者へ シテ 事へ シテ 出 シテ 也 シテ

事と。錦戸恭衛を念ふ思ふ。兄弟
 の敬とある。某の同公（同公）の
 まは。先業して。は。家分。今。後
 頼まれ申し。君よ。公（公）の。親
 け。遺言。言。事。弓。矢。て。め。取。辱
 ぬ。一。人。か。り。或。は。我。よ。か。り。買。入
 二。君。う。は。入。も。真。女。兩。よ。ま。ま。入。り。や

此。時。の。男。女。も。一。か。り
 一。馬。の。家。よ。り。行。き。つ。る。君。よ
 へ。う。て。任。せ。り。か。り。申。す。某
 同。公。の。錦。戸。恭。衛。を。念。ふ。思
 ひ。今。時。に。お。し。や。り。あ。り。可。た
 ぬ。某。の。親。の。遺。言。を。知。り。し。
 只。も。一。か。り。の。買。入。り。

も口惜まいたはあつた方(もあつた人)

女

うらゝ歌りよあつた人(うらゝあつた人)

下七三

あつた人(あつた人)

は身(はみ)のあつた人(あつた人)

し(し)のあつた人(あつた人)

あつた人(あつた人)

下七三

あつた人(あつた人)

あつた人(あつた人)

下七三

あつた人(あつた人)

あつた人(あつた人)

下七三

あつた人(あつた人)

あつた人(あつた人)

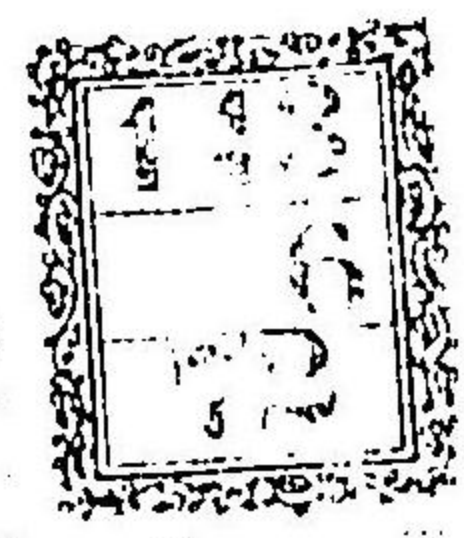
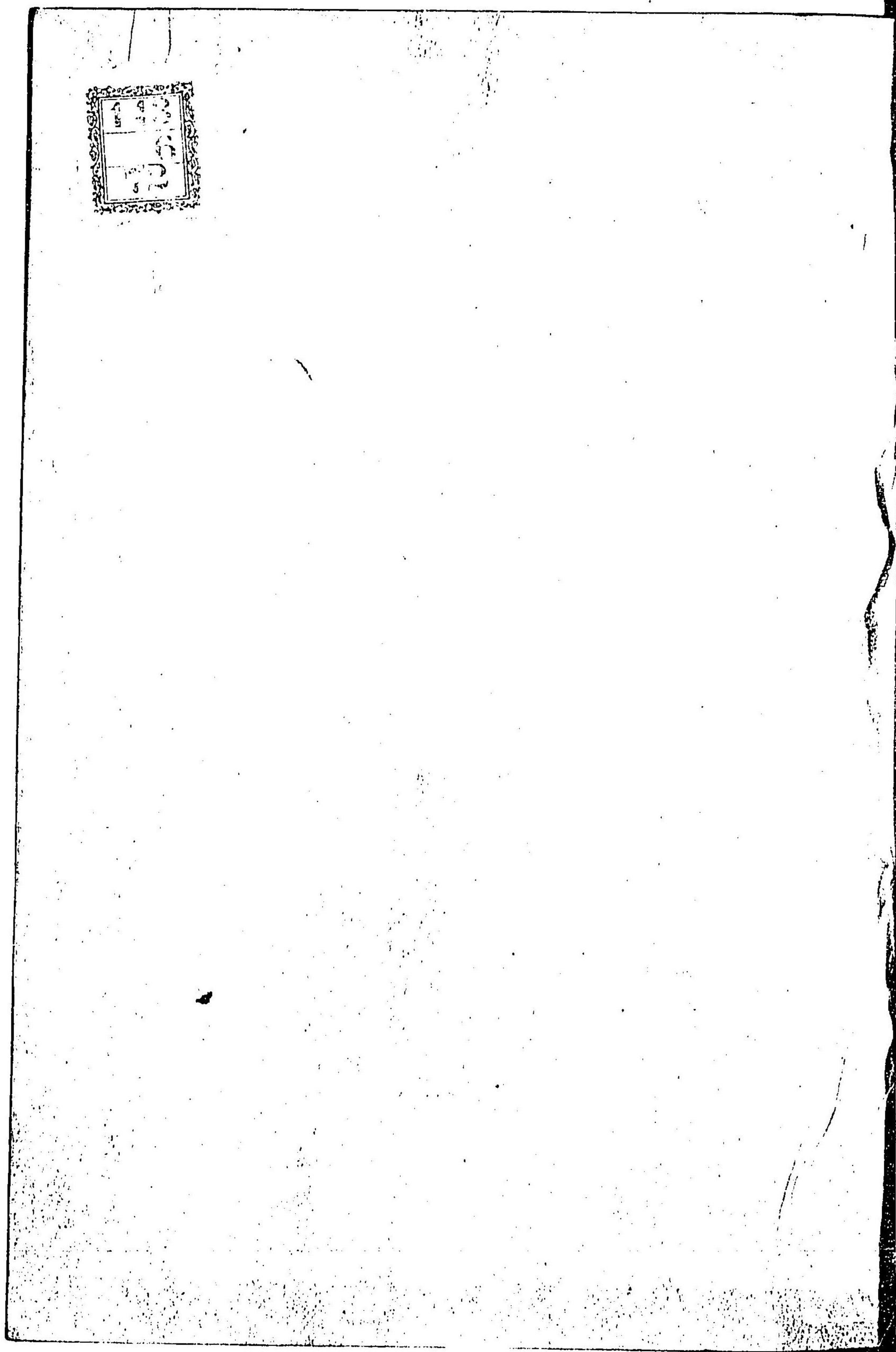
あつた人(あつた人)

あつた人(あつた人)

綿名

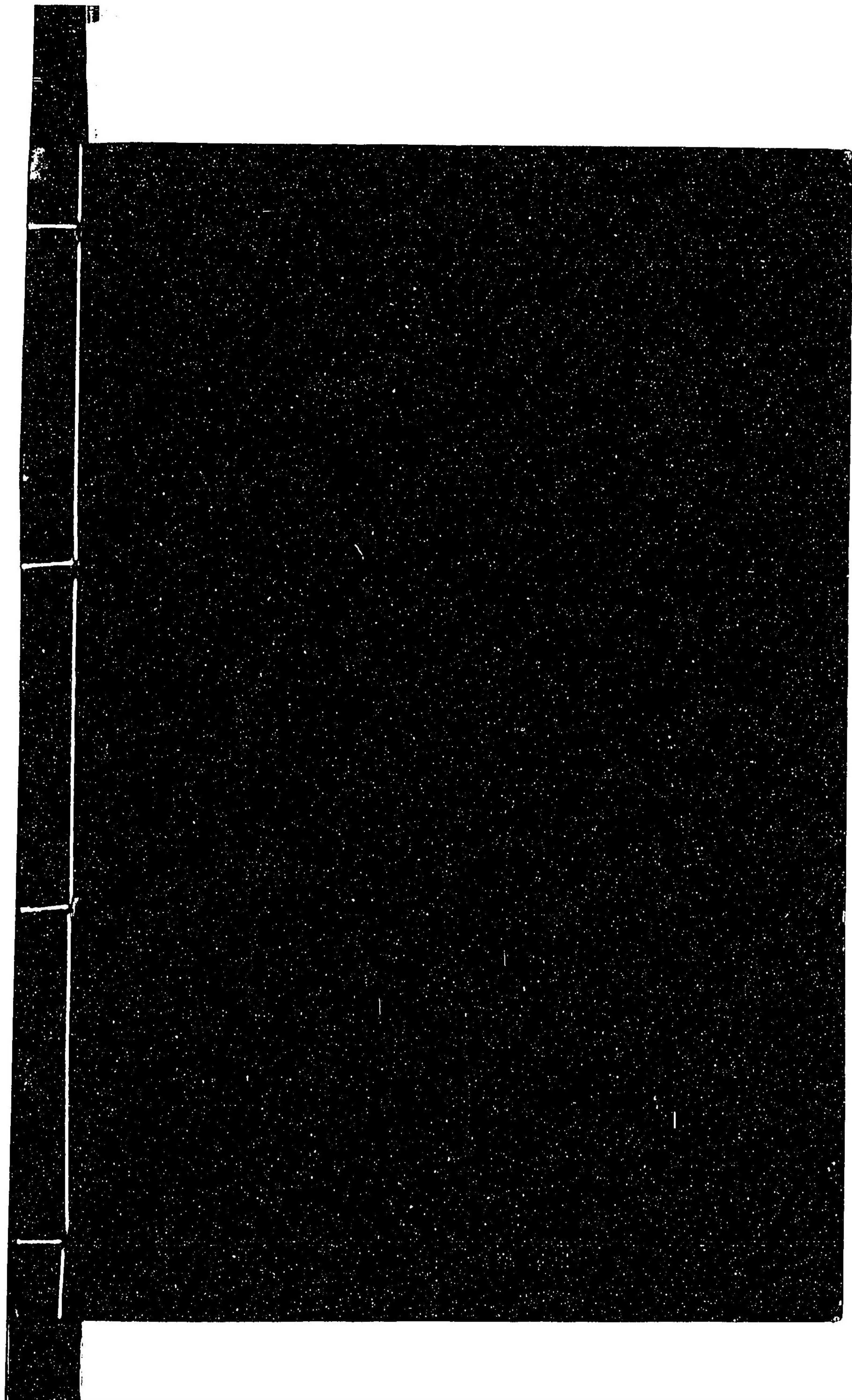
刀を清きて胸のあはれおほききま
 くまろくくと倒きしむれを私泉
 死骸もまけて位より外らぶりあま
 く藤浪のがら行る松乃指さ
 嵐やよせうて教へてあま私泉
 のこりも造りまけ水入洋楼も流し
 如か頃洋二列ぬらふしは謀る秘

身とまふ世恨と更も思ふらるる
 事よ腹切ぬ何錦戸乃討手
 中くむらひシテト荒らふもさく
 対面ヤとことおのまて膚より
 大なる刀追ぬ櫓小あり大音のまて
 名乗る君はあまのまての義
 君と重ひ親子ろ孝の賢人



一

一



143
6
72

和書門
音樂
類
函
架
五
六
號
冊

東 京 圖 書 館				
六	六	五	四	和書門
冊	號	架	函	音樂類

074959-001-4

143-72

觀世流別能二十八番之内

觀世 清孝/校

M14

CEL-0698

